

HOF 01-023

本田財団レポートNo.23

「西ドイツから見た日本」

電気通信大学教授 西尾幹二

このレポートは昭和56年3月3日、パレスホテル
において行なわれた第17回本田財団懇談会の講演の
要旨をまとめたものです。

はじめに

本日のテーマに、「西ドイツから見た日本」という簡単な題を付けてしまったのですが、「日本から見た西ドイツ」というもう1つの視点もあり得ます。この、日本から見た西ドイツは論じつくされているように思われていますが、実は意外と知られていない面があるし、また偏見ないし先入観も多々あると思うので、本題に入る前にその見落としがちな、大事ないくつかの点をお話したいと思います。



西ドイツに対する先入観

ドイツと申しますと、私たちは集团的に規律正しく運営されている国、そしてたいへんに権威主義的な国というイメージを持っています。また、フランス、イギリスに比べて後進国であり、それがゆえにナチズムという厄介な事態を招いたのではないかという歴史観をも、一般の日本人は持っているように思います。しかしこれは半分正しく、半分当たっていないのではないかと思います。それは恰も、ヨーロッパ人が日本について定義づける事が半分正しく、半分当たっていないのと非常によく似ていますので、最初に申しあげてみたいのです。

● 遵法と自由

まず確かにドイツ人は規則正しく、法規をよく守る国民だという事は事実でして、ドイツ語には「お上に従順」という形容詞さえある位で、お上の決めた事に非常に忠実な民族であることは事実です。例えば、西ドイツでは地下鉄などが無改札です。

私の友人のイギリス文学者が西ドイツ滞在中の私を尋ねて来て、一緒に地下鉄に乗ったのですが、全く改札が無かったのに驚きました。彼は共産国家をずっと歩いてきた直後であったので、大変にたまげて、「いや、自由主義の国はいいですなあ。なんと電車まで自由だ。」と冗談を言って喜んだわけです。勿論、ただ乗りした者に対する罰金制度はあります。違反が見つかりますと、乗車賃が2マルク位の所で約40マルク位罰金を取られます。しかし私はミュンヘンで切符を買ったり買わないでみたりして、1ヶ月近く乗って見たのですが、ただの1度も検札に会いませんでした。それくらい放ったらかしであれば、当然ただ乗りが多数あるのであろうと思うのですが、ドイツ人に聞きますと、無い事はないのだけれど、しかしそれは非常に混雑しているラッシュアワー時に、違反者は1車両につき1人か2人くらいなのだそうです。だから、めったに検札にこなくても経営は成りたっているということです。

これはドイツ人が規則をよく守る、決めた事に対しては忠実な国民であるゆえんであろうかと思われます。しかしだからといって、全てに盲従する国民では絶対にありません。一面では極めて我がまま勝手な民族であるし、同時に非常に個人主義というか、我が道を行くというか、少しアナーキステック（anarchistic無政府主義的）なところさえある国民です。

たとえば1例をいいますと、私がドイツのある大学で実際に教鞭をとっている日本人教授から直接きいたことです。西ドイツの大学で授業の時間割を作るときの話を聞いて驚いたのですが、日本の大学では時間割委員会による決定に従い、事務局の教務課が先に決め、何曜日の何時は誰々がやれと命令されたら、いかなる教授もそれを否定することはできないのです。委員会にいろいろ文句を言ったりもしますが、だいたい決められた通りになります。ところが西ドイツの大学では、A教授は月曜日の午前中の2時間め、B教授は午後の3時間めという様に自由に自分で申告するのだそうです。これが大学の自治であり、教授会の自治であり、学問の自由であるというのが西ドイツ人の考え方です。ですから西ドイツの大学は夜まで授業をやっていて、夜の6時からという授業があるのです。これは夜学部ではありません。ふつうの授業が6時から行われるのです。それは先生方が勝手に決めるからで、「私は昼はやらないで夜だけ授業をする。」という我がままな先生もおられるそうです。そういう気侷勝手のため、たまたま授業がかち合って教室がとれない時には、教務課の事務員が教授たちの所を歩き回ってやっとまとめるというくらい、互いに我が道を行く気位が高いのだそうです。

もっともこれは変な意味での我が道を行くですが、いずれにせよそれくらい個人主義が強くて、議論好きで、なかなかものごとが決まらない。それがドイツ人のもう一方の性格です。いま西ドイツでは教育問題で荒れているのですが、これも議論ばかりしていて物事が進まないということが原因をなしているようです。

● 地方分権

それからドイツについては、一丸をなして国全体がまとまって動いている様な印象を日本人は持っていますが、実はドイツはフランスほど中央集権の強い国ではありません。むしろ各州の力が非常に強い国です。それは州単位の自己主張がはなはだしいため、国家としてのまとまりが悪いという状態を招来しているほどです。

例えば教育に関しますと、文部省という国全体をまとめる省はなく、各州に教育省というのが設けられてあり、これがそれぞれ勝手に事を決めます。ある程度の共通の足場は作ってあるのですが、細目になると、州ごとに制度が違っても良いほどなのです。従ってまとまりが非常に悪く、本来高等学校の卒業試験に通れば誰でも大学に入れる事になっているにもかかわらず、これが最近では高等学校のレベルが州ごとに違うため、例えば北ドイツ

の州ではだいぶ点数が甘く、伝統を守る保守的な南ドイツの大学では、北ドイツの高等学校の卒業証書は認めないといい出したりして混乱しています。

ですから西ドイツというと、私はむしろ非常に個人主義的な傾向がつよく、まとまりの悪い国家だと思っています。地域性が強く多様性に富んでいるために、かえって2度にわたる近代国家の統一、つまりビスマルクによる国家統一とヒトラーによる第3帝国がそれぞれ強権発動によらざるを得なかったのではないかと、私には考えられます。それは逆にいえば、その様な強権を発動しなければまとまらない程、手前勝手な国民であるということにもなるのかもしれませんが。

●ドイツの後進性

それから日本人の偏見ないし先入観に、フランス、イギリスに対して、ドイツは後進国であったという考え方があります。これはいわば私たちが戦後教わってきた世界史の常識であるかもしれませんが。先進性は常にフランス、イギリスにあって、ドイツ、イタリア、日本は後進国であり、それがゆえに戦争を起したという説明がこれまで多くなされて来ました。

ところが現在の西ドイツを考えてみますと、中産階級の中といい、貧富の差が少いことといい、平等意識のひろがりといい、西ドイツの方が、英仏より今やはるかに先進的であるといえるのではないかと思います。しかもこのことは必ずしも、戦後においてはじめていえることではないように思います。通例、西ドイツの戦後の奇跡の経済復興で初めてドイツの近代性が発揮された様に考えられていますが、実際には鉄鋼生産量でドイツがフランスを抜いたのは1880年、イギリスを抜いたのは1913年なのです。この事態を常識の目で見れば、ドイツの上昇のカーブは1871年のビスマルクのドイツ統一という事態に始まり、ナチズムというエピソードを間にはさんでいるにせよ、戦後の西ドイツの繁栄に続いているのだというように考える方が、私は自然な歴史の見方だと思うのです。

ところがこの見方ほど西ドイツのインテリ層に人気がない考え方はなく、たちまち本国においては否定されてしまうでしょう。また同時に西ドイツのインテリの見方を踏襲している、日本のインテリの見方にも逆う考え方の一つであるようです。すなわち、ナチズムにいたるまでの戦前のドイツの歴史を全てナチズムの前史と見たがり、ナチズム以後の歴史はいかにナチズムを脱却したかという、いわば過去清算の影としてしか見ていないのです。従って本年2月の『中央公論』にも「証言 われわれのなかのヒトラー」というような、日本人が今さらそんな事をいってもしょうがないと思われる論文が、まだ載っているのです。西ドイツでもそういう考え方が今なおかなり強く、私が今申しあげた様な逆の見方を提出しても、あまり理解してもらえない状況もあるようです。

しかしながら、ビスマルクに対する評価は西ドイツではいま徐々に高まっ

てきており、単にビスマルクが保守反動であってナチズムを準備した、というような粗雑な考え方は消えつつあり、そういう考えを持っている人は今ではあまり多くないだろうと思われまゝ。しかし西ドイツでも中には非常に急進的な考えを持つ者もいまして、たとえばトーマス・マンがある意味でいけませんが、ナチズムの源泉はマルチン・ルターにあるというようなことをいって、戦後知識人らしい反応をしました。これには教会関係者が非常に怒っています。

私は確かにある面においてドイツは後進的であったと思うし、日本もそうであったと思うのですが、今やその様な単線型の見方だけでは満足な歴史の見方ができないのではないのかというのが、今日考えてみたい問題の1つであります。

愚かなり「日本特殊論」

● 近代と前近代

私が本年の2月号の『文芸春秋』に、「愚かなり『日本特殊論』」という論文を書きましたところ、あれ以降あちこちの週刊誌や雑誌で皆いっせいに、「日本が特殊だというのはおかしい。」といい始めています。しかしこの10年くらいの期間はずっと一貫して、日本が特殊だというのが流行の考え方でした。

中根千枝さんの『タテ社会の人間関係』、イザヤ・ベンダサンの『日本人とユダヤ人』、土居健郎氏の『甘えの構造』など、みなそうした特殊性を強調した考え方で、70年代の流行の思想の先鞭をつけました。日本の民族は欧米と比較して個性を欠いており、個性を欠きながらきわめてうまく運営されているのは集団性のおかげである。日本社会のこの集団体制というものを非常に評価し、評価することによって日本の優位を説明しようとする議論が、70年代を通じ今まで圧倒的であったと思えるのです。

しかしよく考えてみると、こういう考え方は昔もあったように思います。戦後の戦争に対する説明がそうでした。これも概ね「近代」が戦争をひき起したのではなく、日本のなかの「前近代」がひき起したのだと説明されていました。すなわち、日本の中に残っていた封建的な部分が戦争原因であったという議論がさかんにおこなわれ、だから戦後の日本は自分の国を反省して近代化し、イギリスの様な近代国家にならなければいけない、というような事がずっと戦後いわれてきたわけです。

しかし、私があの時非常に疑問に思いましたのは、戦争の主役は「前近代」ではなくて「近代」であったのではないかということです。なぜならば日本は墜落する飛行機を造ったわけではないのです。戦艦大和を造り、ゼロ戦を造った。すなわち、主役は日本の「近代」なのであって、決して「前近代」が戦争をひき起こしたわけではないのです。だから戦後の国力の回復にもそのままつながったといえるでしょう。戦争の主役は何であったかとい

う事を考えると、それは「近代」が1つの発火点に達したと考える方が、日本の「前近代」が主役であったと考えるよりも、はるかにすじが通っている様に私は当時思っていたわけです。日本は「特殊」だという、それと似た様な事が最近またいわれているわけで、その点がずっと一貫して私が疑問に思っている事です。

●西ドイツの状況

— 氾濫する日本製品 —

さてそれでは話は変わりますが、私は去年の9月から12月にかけて西ドイツに滞在しました。その間に、私は特にその事を調べに行ったわけではないのですが、やはり日本の製品が非常に出回っている現状を一旅行者の立場でショーウィンドーにながめ、考えること多々ありました。カメラや時計や自動車がたいへん出回っている事は誰でも知っていますが、ほかにオーディオ機器、卓上計算機、VTR、複写機、レジスターなどがショーウィンドーにたくさん並んでいました。そして週刊誌をながめると、約3分の1が日本の製品の広告である事すらあるのです。また、日本の化粧品会社が進出し始めているという話も聞きましたし、驚いた事にドイツ文字のタイプライターまでが日本からドイツへ輸出されているのです。これにはたいへんびっくりしました。また、新聞や週刊誌には威勢の良い広告が出ておまして、「日本でNo.1とは、世界でNo.1以上を意味する。」という言葉が一たしかタイヤの広告であったと思いますが— 広告文字として使われていました。

— マスコミの論評 —

私もいくつかの雑誌を持ち帰ってきたのですが、これは『シュテルン』という週刊誌の1980年9月11月号の自動車特集号です。日本の自動車と西ドイツの自動車のボンネットの上に、それぞれ日本の武将と西洋の騎士が乗ってぶつかり合い、決闘し、ごらんのように「彼ら（日本人）は、はやくも戦争と勝利について語っている。」という様な説明文が書かれています。それからロボットが働いているニッサンの工場内と、労働者が働いているBMWの工場内の対比も、この様に大変に印象づよく掲げられています。またこれは『シュピーゲル』の表紙で、ビデオの絵が表紙につかわれていますが、これも日本のビデオの特集号で、やはり日本製が市場を占領しているという事をたいへんな話題にしています。事実、私は街角でテレビやビデオが置いてあるショーウィンドウの前に、ドイツの若者たちがぎっしり並んで見ている場面いくども出会いました。そして、ショーウィンドウの約9割が日本製品であることを確認しました。ドイツの「グルンディッヒ」とオランダの「フィリップス」の2社だけが何となく場所を持っていて、対抗しているようにみえましたが、後で聞けば「グルンディッヒ」の機械の中味は全部日本製だそうですね。

私も一旅行者として、そういう情景をまのあたりに見れば当然心強く、日本人に会うたびにすごいなあと話合ったりしました。たかだか15年前の私の留学時代には、知識人は別として一般的レベルでは、日本のことを西ドイツ人はあまりよく知りませんでした。私がビールを飲んでいると、「お前は日本に大学が無いからドイツに学びに来たのか。かわいそうな事だ。」といわれたものです。それくらいだったのですが、最近ドイツのマスコミでさかんに日本の事をやるものですから、今では民衆の末端にいたるまで日本が技術大国である事を知られています。

しかし、テレビのタイトルや雑誌の特集あるいは講演会の題目などで使われる、「日本の挑戦」ということばですが、この「Herausforderung Japans」、すなわち今さらのように「挑戦」という言葉が用いられること自体が、実は日本を先進国の仲間に入れていなかった証拠ではないでしょうか。つまり、「挑戦」という言葉が使われるならば、それならばたして今「フランスの挑戦」と人はいうだろうか。あるいはヨーロッパの一角で起こった事を、例えばドイツに対してアメリカ人が、「ドイツの挑戦」というだろうか。私はいわないと思います。つまり日本が世界の話題にされて日本人は今喜んでいるのですが、良く考えてみると「日本の挑戦」という言葉自体に、今まで挑戦するだけの力も無かったものが、突如として挑戦しはじめたという響きがあるのです。それからよく、「日本はなぜ我々の最大の競争国となったのか。」という言葉が聞かれますが、これも同じように、彼らはやはり今まで日本を競争国だと思っていなかったのだろうか、という疑いを我々に与えずにはおきません。だから私は単純に喜べないと見ています。

— 一般国民の意識 —

私は初め、日本の商品がこの様に出まわっている事をたいへんうれしく思い、かつ勇気づけられておりましたが、しばらく滞在して時間がたつてみますと、「日本の挑戦」という言葉に疑問を持ったり、むこうの人と話をしていくうちにだんだん違うなと感じてきました。つまり単純に優越意識は持てないと思ったのです。第1は、私たちが考えている程、西ドイツの人たちは反日感情にかりたてられてはいないという事です。つまり、日本ではとかく貿易摩擦の結果、例えばアメリカ人がこぞって日本に悪感情を持っているとか、西ドイツ人もそうだとかが考えがちですが、じつは悪感情をもつというのは業界の意見なのであって、一般国民は廉価で良い製品が入ってくればうれしいのです。消費者はどこ国でも同じです。日本でもそうですが、一般にジャーナリズムは政府の意見や業界の意見を非常に色濃く反映しているものです。従って私は、日本がもっともっとやって相手を圧倒するまでやると、彼らのあいだに何が起るのかといえ、必ずしも嫌悪感ではなく、そうなっではじめて尊敬心が起るのではないかとさえ思うのです。欧米と日本との間にある落差は、今でも尚それくらい大きい。つまり我々がいくらやったと

ところで、恐怖心を起こす段階まではなかなかいかない。日本ではそこが錯覚されている。つまり日本に伝えられていることと、西ドイツで感じることとちよつと違います。西ドイツの一般の人は落ちついており、日本で騒がれているほど貿易摩擦で反日感情が高まっているというようなことはないとは私は感じています。もともと西ドイツという国は親日的で、「日本がんばれ」という気持ちが多少厚い国ですから、何か事が起つても、すぐ悪感情に傾くよりも、日本を弁護する傾向もありますので、他の国とはちよつと事情が違うかもしれません。ただ、なぜ恐怖感をさほど感じないでいられるのかというと、実は一般民衆は日本の実力というのか、本当の産業の力というものを知らないのだと思います。知らないから恐怖感を感じるどころまで行かないのだと思うのです。だから日本はもっと遠慮なく進出したらいいんだ、と私は思います。私が会ったインテリ、いわゆる産業に関係しない文学者だとか教育学者だとかという人たちは、今まで欧米人は非常に得意になっていたし排他的であったのだから、ここらでアジアがもっと進出してくるのは、地球上のバランスからいっても良い事ではないかと私にいたり、少くともまだまだ日本をたいした事はない国だとなめているなどと思わせることばを吐きました。なめているからそういう事をいい、事実を知らず、知らないから恐怖を感じていないのだと思います。

ところが一方、良く事情に通じているはずの政府や産業界の人たちも日本の実情を知っているかということ、やはり本当のところは知らないので、逆に恐怖ばかりを感じてしまうのではないかと思います。実際以上に日本の進出のスケールを恐れて、日本人の心を知っていれば常識的に恐れる必要のないようなことに関してまでことごとく重大に考える。そこで恐怖を感じる一部の政財界の人々は、今度は一貫してアンフェアという言葉を使います。日本はアンフェアだということです。

—アンフェア—

このアンフェアという言葉はドイツ語にも英語からそのまま入っており、不公正という意味ですが、われわれには非常に遺憾とするべきことばです。なぜならば彼らのご承知の様に、今まで日本側にダンピングだとか、低賃金だとか、不公正な労働時間差だとかさんざん非難してきて、そのどれもが日本に当てはまらず、そういうことをだんだんいえなくなっている事に気がついて来たのです。というのは日本人は今では別にダンピングをしていないし、低賃金でもないし、労働時間差もそんなにひどくはなく、これらが現実に数字ではっきりしてきているからです。そうなると、通産省の行政指導がいけないのだとか、円のレートが人為的に低く抑えられているとか、いろいろ新たな難癖をつけてくるのですが、しかしその心理をよくよく考えてみますと、どうも日本人であることがけしからんといっている様に聞こえてくるのです。日本の通貨が特別低くおさえられているといいますが、今では事実

そんなことはありませんし、さらに日本の通産省の行政指導が行き届いていてアンフェアだというならば、各国がやればいいのだし、事実各国もある程度やっているのです。彼らはいろいろな事をいっていますが、これら全てが弁解になっており、弁解にすぎないことに彼ら自身今ではうすうす気がついてきたのです。そこで彼らは何をいうかというアンフェアという。この言葉を使って、日本人であることが何かけしからんとしか聞こえない様な議論を展開します。いいかえれば、日本人の人生観、労働観がアンフェアである。つまり日本の文化そのものが、アンフェアな存在だといっているように聞こえてくるのです。

ところが、困ったことには、さながらそれに追いつけぬかの様に、我々日本人がうまくいくのは日本の文化が特殊だからだとか、日本の社会がタテ社会であるからだとか、日本の社会には「イエ」意識があるからだとか、我々は集団意識によって経営しているからだとか、等々ご承知の「日本人論」を、日本の知識人が説明するのです。それを欧州の報道人がずいぶん聞きに来ています。ドイツやフランスから来た特派員は日本の知識人に会って、日本の社会は特殊だとの説明を聞かされますから、「そうか、それで解った。」と彼らは納得するのです。しかしこういう納得のされ方は困るのです。集団主義というのは、コレクティビズム (collectivism) です。訳せば全体主義と同じことですから、彼らに私たちがそういう説明をしてはたして良いものであるのかどうか、はなはだ疑問といわなければなりません。

● 無人格の日本

私は西ドイツで実際に生活していて、まず商品がたくさん出まわっていることに非常に感激したのですが、だんだん疑問に思った1つには、商品というのは確かに日本人の作ったものですぐれているかもしれないけれど、ビデオテープであれ、テープレコーダーであれ形は欧米産のものと同じなのですが、日本的特性もまた目に見えない箇所がたくさん現われているのでしようが、近代工業製品というものはこの国へ持ち出しても結局形は同じ様なものになってしまいます。日本人の文化が自己主張している様にはどうしても見えません。少なくとも近代工業製品に人格を感じさせないという一面があります。これを1つの大きな問題として感じたわけです。

それから日本の旅行者はあちこちでうろろしていますが、彼らこそまさに人格を感じさせない人々ではないのでしょうか。新聞を広げますと最近では日本のことがたいへんたくさん出ていますが、それは経済記事、又は経済がらみの風俗記事にすぎません。しかも、経済記事といっても、日本の経済学者の発言が向うの新聞に大きく出ているなどということは皆無に等しいのです。

先日、雑誌『諸君！』にアメリカの経済学者を取材した記事が載っていました。その記事を担当した編集者から直接聞いた話で驚いたことに、むこ

うの経済学者は日本の現実に対しては非常に好奇心を持っているが、日本の経済学者の書いたものには全く興味を持っていないそうです。その編集者はそれを聞いて愕然としたといいますが、私のいいたいのも全くそのことなのです。カーター大統領が先日退陣した時、『タイムス』の編集者を前に、記憶に残ったいろいろな政治家の名前をあげ、サダトもベギンも誉めていましたが、ついに大平氏の名前は出てきませんでした。結局日本の政治家から経済学者にいたるまで、彼らの価値観、彼らの尺度をもってしては、人格というものが感じられないのではないのでしょうか。我々は相手に人格を感じさせなくてははいけないし、我々が無人格だなどとはなにびとも考えることはできません。それどころか日本人はきわめて人格的な人種だと思っています。しかし少くとも欧米人にはそれが人格として感じられないとしたら、これは文化交流をする上で最も大きな、根本的な問題ではないかと私は思うのです。

私がむこうで新聞を見ていて、日本の政治の記事は時々見かけましたが、政治家の記事はほとんど見る事が出来ませんでした。たった一度でしたか、鈴木総理が顔写真入りで出ていましたが、それは鈴木総理が議会で原稿を1ページ読み飛ばしてしまったために、議会で謝罪をしたというものでした。

「読み飛ばす」というドイツ語はユーバーブレッテルン (überblättern) で、blättern というのはパラパラとページをめくるという意味です。それにüberの「飛び越す」という前綴がつけてあって、奇妙に印象深く覚えているのです。これは夕刊新聞に出ていました。

こういうこと自体が日本をからかおうとする悪意が、ドイツのジャーナリズムの中にある証拠だと私は思います。それは常々日本人といえば、この様に人格を感じさせない存在だと彼らが決めつけている、その表われだといえないこともありません。

— 過去の文化だけが日本の文化ではない —

しかしながら、こういう考えもあります。我々は自動車やカメラや時計などですぐれた技術を発揮してきましたが、これは近代技術の中に日本の本来の伝統文化が生きているためだという考え方です。能や歌舞伎や生花だけが日本の文化ではない。カメラや自動車や時計の技術の中に日本の伝統文化が生きているのだ、と考えるべきだということです。日本の製品はアフターケアひとつとっても、非常に優れているために良く売れると言います。しかしこのアフターケアの精神なども、日本の文化であるという考え方ですが、全くその通りだと私も思います。文化というのは、過去に死んでしまった能や歌舞伎などにだけあるのではなく、まさにこの現代の、私たちの社会に生きているなにかであるとする考え方は正しいのですが、しかしながら、日本の製品に対して欧米人がこれを文化として感じないというところにもうひとつ別の問題があります。彼らはいくまで、「工業製品の元祖は欧米人のものであって、それをたかだか日本人は上手に作っているだけだ。」と思っています。

欧米にはそういう考え方が圧倒しています。少くとも現代日本の最大の所産であるといえる高度産業社会に、彼らは精神性を感じてくれないのです。それが問題です。私たちはどうやったら彼らに精神性を感じさせることができるか。どうやったら日本の現代人の仕事を人格として彼らに認知させることができるか。ここに私は、これから私たちが解決していかなければならない一番大きな問題の一つがあるのではないかと思います。

考えてもみて下さい。例えばドイツ人はロシア人を非常に憎たらしい国民だと思っているでしょうが、しかしロシア人にその憎たらしいという人格を感じているのだと思います。それからイタリア人はだらしのない国民だと思っているでしょうが、だからまさに彼らにだらしのないという人格を感じているはずであります。しかし日本人に彼らは何を感じているのでしょうか。何も感じようがないというのが実情だと思います。このように、日本人の正体が何だか解らないと思っているところへ、商品ばかりが次々と流れ込むものですから、むこうの立場に立ってみれば、あたかも別の星から来た生物が突如繁殖したかの様な印象を受けるのではないかと思います。

ここに、『クヴィック』という西ドイツの大衆雑誌を持ってきました。昨年の秋の号で「ヤパーニッシュェス・ヴンダー(日本の奇跡)」と題する日本特集が載っています。ご覧のように先づ新幹線です。次は自動車の工場内。次は兜町、世界2番目の証券取引所と紹介されております。それから意地悪にも、世界第1の国の中心都市東京の空は何とみにくいことか、電信柱でくもの巣の様になっている、という写真説明もあります。このように『クヴィック』という雑誌が4号に渡って日本特集をやっているのですが、その4号目にしきりにいっていることは、比較的正確な日本の事情案内であって、じつは日本人をマイナス面では一言もいっていないのです。特に労働時間などでは、実地に日本の各企業に調べに行き、平均して日本の労働時間はドイツのそれよりも少し多いくらいで、週で2時間少ない企業もあるという事までいっていて、非常に好意的かつ公平な見方を守っています。しかも知的な説明で、日本に対して憎悪を向けようとする様な気持は始めから無いのです。しかし最後の段階で、ではなぜ日本人は成功したのかというところにきて、次のような困った結論に終わります。すなわち「日本人は西欧人の全くあずかり知らない生活観、労働観を持っているから強いのだ。」と解釈しています。「彼ら(日本人)は我々とは全く異質な人生観を持って働いている。それゆえに成功するのである。技術に関して我々が負けているわけではない。しかし労働のしかたや社会の仕組みがあくまで我々とは異質であって、我々の想像を絶する様な独特のものである。」と。この点に、人格不在の集団意志みたいなものが日本人にはあると、西欧人が感じる原因があるのではないかと私は思うのです。

— 関心を持たれない日本の現代社会 —

たとえば私は教育事情を調べるために、今度あちこちにまわって見たのですが、非常に感心した事は、西ドイツの学校の学級の生徒数の少なきなのです。高等学校の1教室が15人位です。これは今いくら西ドイツの教育界が混乱し、問題をかかえているといっても流石だと思った点です。一方日本人が中国へ行きましたら、あのものすごい人間の数を見た瞬間に、それだけでわれわれは説明のできない圧迫感を感じるでしょうし、あんな事ではたして教育が出来るのだろうかと思うことでしょう。丁度それと同じで、西ドイツの人が日本へ来て、日本の学校を見たなら、1教室50人位いるわけですから、あれで教育ができるのだろうかと感じると思うのです。その辺に彼らが日本人を見る時に、自分たちには理解の出来ない集団意志を持った特殊な民族だと、日本人を規定しようとする原因があるのだと思います。こう規定することによって、ある意味では西欧人は安心できますし、少なくとも技術の優位という点では西欧世界は依然として日本に立勝っているんだ、という自己弁解ができて、安心もできます。それから安心できるだけではなく、恐ろしい事にはそれを理由に、もしも日本が世界の仲間入りをしたのなら、そういう謎の部分無くして出直して来いといういい方をわれわれにするようになって参ります。日本人が持っている日本人としての人格を人格として認めないで、それをむしろ抹殺する事によって仲間入りを許しても良い、という理論になってくるわけです。現に最近の状況はそうなっているのではないのでしょうか。私はその辺が非常に深刻な問題のひとつではないかと思えます。

たとえば私が1番驚いたことに、彼らが現代日本というものに精神性を感じてくれている1・2例をあげてみましょう。私はむこうで、本屋のカタログを調べてみたのですが、日本人が書いた現代日本に関する評論が全く翻訳されていないのです。小説は川端康成や井上靖のものが出ていましたし、時たま大江健三郎なども出ることがあります。このように現代小説の翻訳が全然出ていないわけではないのですが、やはり西ドイツなどでは、エキゾチックな味の強い文学が良く出るといえます。しかし小説以外では、現代日本の文化や社会を論じたまともな評論はまったく紹介されていないのです。紹介されているのは古い伝統芸能や宗教であって、現代日本ではありません。つまり、いぜんとして禅、能、歌舞伎とかばかりが翻訳され、事実ある日本学の教授が、『タテ社会の人間関係』を翻訳しようと思ひ、本屋にもちこんだところ、あらゆる出版社から全部ことわられて挫折したという話を聞きました。『タテ社会の人間関係』が、私としては今西欧に紹介されるのは内容的にうれしくないのですが、しかしこれが少くとも日本の現代の社会というものを分析している評論であることは事実です。現代の日本の社会に西ドイツ人やヨーロッパ人が関心を持たないので、この本は売れないだろうし、従って本屋は出版しないという結果に終わったようです。基本に無関心が横たわっていますので、たとえば日本側からお金を出してこういう現代評論を翻訳した

り、あるいはユネスコの方で翻訳したりしても、はたして彼らが手に取って読むかどうかは解りません。それにひきかえ、フロムの『精神分析と禅仏教』という本は西ドイツでベストセラーになっているのです。禅仏教に対しては当然ドイツ人たちは関心を持つのでしょうか。これは日本の古い文化には彼らが精神性を感じている証拠だともいえます。しかし現代日本に対してはおよそ彼らは人格を感じようともしません。ここに我々はどうしようもない問題の壁、ディレンマを感じないわけにはいきません。

— 無人格を評価する日本の論壇 —

ところが何とあきれた事には、西洋人が正に否定しようとしている、あるいは自分たちと異質とと思っているこの人格不在の集団意志、つまり西欧側からみての日本的特性をプラスの意味に評価しようとする作業が日本の論壇で今や圧倒的にさかんになっているのです。たとえば『超先進国日本』という本が出版されたりして、その本だったかどうかは忘れましたが、「日本は経済や産業だけが進んでいるのではなく、デモクラシーも超一流で、政治的にも最も成熟した国民である。デモクラシーでも世界の最先端を行っている。」という様な議論が最近あちこちから出ているのです。自民党が鈴木総理大臣を選んだあの経緯が勢いをつけたのかどうかはわかりませんが、「日本人は『和』の国民であって、強力なリーダーなどは必要としない国民である。皆が弱いリーダーを囲んで仲良く集団体制を敷いていく。これこそ西洋が学ぼうとして学べない日本型デモクラシーの先進性である。」といった様な自惚れた議論がさかんに出ていて、私はあっけにとられてたものでした。いわせておけばどこまでいい気なことを言い出すか解らないと私は思いました。

つまりこんな議論は世界の誰も認めません。認めないことは以上にくりかえし申し上げてきたとおりです。それを日本人だけで悦に入ってしまうことをいって、平気でのぼせ上っているのではないかという気が致します。これが、「戦争の原因は日本の前近代性であった。」という以前の議論とどこか似ている様な気が致します。「日本の産業の成功の原因は、日本の封建性と前近代性にあった。」という様なおかしい議論にやがてつながって行くのではないかと想像する事も出来ます。私はそういう所が日本の知識人の足りない所、思想界が真剣勝負をしていないところだと思えます。しかし、実業界の実践に立たれている方は必ずしもそういうおめでたい事はいいません。明日日本がどうなるか解らないという事を、絶えず感じながら生きているせいだろうと思えます。ついこの間も松下電器の方が書かれた文章を読みましたら、「そういう甘い事はとても自分達にはいえない」と書いていました。ところが日本の大学教授ならびに一部ジャーナリストはそういう結構な事をいうのが好きです。昔からそうなのです。いわば暇人の寝言とってよいでしょう。実際に勝負をしていない種類の人々が一様にそういう解釈をしがちなのですから、傍観者の解釈というのは困ったものだと思います。もし日本の経済が仮

に急激に没落していったとしますと、「日本人はダメだった。」という議論がわっと広がるに違いありません。なぜならば日本はダメだという議論はついこの間まで日本の風潮だったのですから。

ご記憶の方もあると思いますが、ライシャワー大使が日本に来たのは11年くらい前だったでしょうか。その頃ライシャワー大使は何を日本人にいったかというと、ただ単に「日本は近代に達した。」といったのにすぎません。日本は近代に達しているのだから自信を持ちなさいといったのです。ところが、日本の論壇がそれにどんな反応をしたかというと、「あれはライシャワー路線だ。」と反撥しました。ライシャワー路線というのはおそらく共産党あたりから出た言葉であろうかと思うのですが、つまり「日本人に自信をつけさせて、現代社会の矛盾と混乱から目をそらさせようとしている陰謀である。」というのです。現にライシャワー大使は、日本が近代に達したのだという当たり前な事実をおおずおおずといただけですが、それに論壇は反発したのですから、ちょうどあの時点まで、「日本はダメである。日本は封建的な国である。日本は近代社会として遅れている。だから何とかして西洋のまねをして進んでいかなくてはならないのだ。」という考えが、単に経済や政治の部門だけでなく、文化の部門にまで一般的に広がっていたのだといえましょう。

例えば文学評論の分野では、桑原武夫氏の『第二芸術論』という戦後の有名な俳句否定論から、中村光夫氏の『風俗小説論』を経てずっと一貫して西洋文学優位論が文壇の中心主流だったのです。社会科学の方もそうだったと私は思います。大塚久雄氏の経済学でも、また丸山真男氏の政治学でも、やはり日本はダメで西欧に追いつけ、というのが基調にあったモチーフだったと思います。

私はダメだというのも誇張だし、日本は超先進国だというのも誇張だと思います。ものごとの事実はずねに真中にあるはずですが、最近全部以前のモチーフがひっくり返って逆になっているのです。文学では日本文学が良い事になっていきますし、社会科学の分野では、日本型デモクラシーの原理を求めてというような事がいわれ、日本的な形態のデモクラシーの原理の発見こそが社会科学だというのですが、科学というところにひっかかります。私には似而非科学だとしか思えないのです。つまり、たまたま今の日本の成功を起点にして、その成功から日本の歴史を遡って勝手に解釈する事は許されない事ではないでしょうか。小林秀雄氏は一貫して、「歴史は解釈できないもので、現代人の好みの解釈で歴史を都合よくゆがめてはいけない。」といい続けてこられました。氏の大著『本居宜長』は氏の解釈ではありません。氏の主観を投彩した創造物ではありません。いわば本居宜長という対象を前に氏が演奏をしているだけであって、氏自身も「私は解釈家ではなくて、演奏家にすぎない。」というようなことをいっています。氏は歴史の意志というものを感じているからだと思います。歴史の意志を感じるような時に、我々が現在の成功を起点にし、そこから過去の歴史を解釈する事がどんなにまちがった行為であるかという事を、むしろ学問の立場から感じないわけにはいきませ

ん。もし現在の成功から過去が解釈できるのなら、時代が変わって今度は日本の産業がダメになると、たちまち日本の過去もダメになるということにならざるを得ません。しかし日本の歴史がそんなに猫の目のようにくるくる変わっていいものでしょうか。

● 日本は特殊ではない

私は、欧米人が現代日本というものにどうも精神性を感じておらず、彼らは彼らの論理をこちらに押しつけてくるばかりであるのに対し、日本は彼らの論理に合わせようとするだけで、他に策がないでいるのですが、それで問題が解決されるとは限らないということを申し上げてきたつもりです。そうはいつでも、精神性を感じない人種に何とかして精神性を感じさせようとしても、そう簡単にはいきません。彼らが日本の禅や歌舞伎には関心を持つかもしれないが、現代日本の文化にはたいして関心を持たないのだとすれば、それはどうしようもないことです。彼らの心まで動かすことはできません。せめて我々にできる事といえば、彼らの誤解に手を貸す様な事をしないということだと思います。誤解の上にさらにまた誤解を重ねる様な愚かな事はできるだけ慎しむべきではないか、私はそう考えるわけです。

慎しむべき第1は、日本の文化が特殊であるという事を日本人自らが主張し、相手にそういう説明の仕方をして、相手を安心させてはいけないということです。我々はあくまで近代的な判断から、例えばロボットを導入して生産性を高めているのであって、何も日本の社会が特殊だからロボットを導入しているわけではありません。その点に関しては我々の社会がむしろ欧米社会よりも近代というレベルでの競争に勝ち抜いているのだと説明する方が、日本の社会が特殊だと説明するよりむしろ正当ではないかと思えます。もちろん日本が近代競争に勝ち抜いていない部分も多々ありますが、勝ち抜いている部分は勝ち抜いているのだと率直にいつでもいっこうにかまわないのだと思うのです。

またひょっとすると、日本はある意味でアダム・スミスが予言した、資本主義の最も理想的な形態を歴史の中で初めて実現しているのかもしれないのです。小さな政府、そのうえ権力の弱い政府、そして自由競争、それからあらゆる点で民間の智恵というものに依存するという、アダム・スミスの資本主義の教えを、むしろ欧米が原理どおりに実現していないのであって、日本が実現しているのだというふうに欧米に主張し、説明していく方が日本が特殊であって、集団体制を敷いて、村落共同体の中に生きているから日本の産業は強いのだと説明するよりははるかに合理的な自己主張ではないかと思はれるのです。それをどう具体化していくかはまた非常にむずかしく、次の問題になると思いますが。

●現代の日本を伝えよう

それから、第2は文化交流の面において一言提言しておきたいことがあります。文化使節を出すときに、日本側は何かというと能や歌舞伎をもっていくのですが、これはもうそろそろ止めたらいいのではないかということです。私は外国にもっていくなれば、日本の現代思想や現代芸術をもっていくべきだと思います。例えば日本はベルリンオペラを日本のお金で呼んでいるのでして、もしヨーロッパの演劇界がゆき詰まっているがゆえに能や歌舞伎を見たいというならば、ヨーロッパ自身がお金を使って呼べばいいのです。それくらいの気がまえが日本人にはあっていいのではないかと思います。相変わらず能や歌舞伎を日本のイメージの代表として外に売りつづけるのは、誤解の上にさらに誤解を重ねる様なことだという気がしてなりません。

ある西ドイツ人の運転手が私に「日本では禅の精神で自動車を造っているのではないか。」というのです。これはほとんど笑い話ですが、向うの人は案外に真剣にそう考えているようです。古い日本と新しい日本のイメージが分裂していて、つながらないからでしょう。もっと新しい日本のイメージを我々の責任で高めていく必要があると思います。今日は最後にその提案をしておきたいと思います。

どうもありがとうございました。

講師略歴

西尾幹二（にしお かんじ）

昭和10年 東京に生まれる。

昭和33年 東京大学文学部ドイツ文学科を卒業。

昭和36年 東京大学大学院修士課程修了。

現在 電気通信大学教授、文学博士

専攻 ドイツ文学

著書 「ニーチェ」・「懐疑の精神」(中央公論社)

「ニーチェとの対話」・「ヨーロッパの個人主義」(講談社現代新書)

「ヨーロッパ像の転換」・「悲劇人の姿勢」(新潮社)

「地図のない時代」(読売新聞社)

「ソ連知識人との対話」(文芸春秋社)

「新開国のすすめ」(日本経済新聞社)

はじめ多くの著訳書がある。

本田財団レポート

No.1	「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭53.5
No.2	異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって 東京大学教授 公文俊平	昭53.6
No.3	生産の時代から交流の時代へ 東京大学教授 木村尚三郎	昭53.8
No.4	語り言葉としての日本語 劇団四季主宰 浅利慶太	昭53.10
No.5	コミュニケーション技術の未来 電気通信科学財団理事長 白根禮吉	昭54.3
No.6	「ディスカバリーズ国際シンポジウム パリ1978」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.4
No.7	科学は進歩するのか変化するのか 東京大学助教授 村上陽一郎	昭54.4
No.8	ヨーロッパから見た日本 NHK解説委員室主幹 山室英男	昭54.5
No.9	最近の国際政治における問題について 京都大学教授 高坂正堯	昭54.6
No.10	分散型システムについて 東京大学教授 石井威望	昭54.9
No.11	「ディスカバリーズ国際シンポジウム スtockホルム1979」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.11
No.12	公共政策形成の問題点 埼玉大学教授 吉村 融	昭55.1
No.13	医学と工学の対話 東京大学教授 渥美和彦	昭55.1
No.14	心の問題と工学 東京工業大学教授 寺野寿郎	昭55.2
No.15	最近の国際情勢から NHK解説委員室主幹 山室英男	昭55.4
No.16	コミュニケーション技術とその技術の進歩 MIT教授 インエル デ ソラ プール	昭55.5
No.17	寿命 東京大学教授 古川俊之	昭55.5
No.18	日本に対する肯定と否定 東京大学教授 辻村 明	昭55.7
No.19	自動車事故回避のノウハウ 成蹊大学教授 江守一郎	昭55.10
No.20	'80年代—国際経済の課題 日本短波放送専務取締役 小島章伸	昭55.11
No.21	技術と文化 IVA事務総長 グナー・ハンベリユース	昭55.12
No.22	明治におけるエコ・テクノロジー 山本書店主 山本七平	昭56.5
No.23	西ドイツから見た日本 電気通信大学教授 西尾幹二	昭56.6